

内田 各種経済連携協定が出ているが、これはかつてなかったことだと深刻に受け止めている。特に酪農、乳製品は徐々に関税が下げられ、酪農家の経営は厳しくなることが想定される。しっかり注視しながら、条件に応じて、国と連携して対応したい。

ホクレンの役割として、貿易交渉の行方とは別に、もっと生産基盤をしっかりさせなくてはならない。なお一層、三本柱を深掘りして事業を進める。

林 十勝は「農業王国」「酪農王国」といわれるが、農業を中心に産業が回っていることに誇りを持っている。十勝の農業、十勝全体の印象は。

内田 車や列車から十勝平野のいろいろな作物に取り組んでいる様子や酪農畜産を見た。最先端の技術を駆使し、農業に取り組んでいることは率直にうらやましい。

私が生まれた空知は水田地帯。個人的には十勝に追いつき、追い越せるようになりたい。十勝は先人たちが先を見据えて築き、時代時代の状況に合ったものを取り込んできた。常に前向きで先進的な農業を進めてきた。

◆自ら付加価値 太田寛一の力

林 十勝の農業は先人の苦勞があり、発展してきた。

内田 冬は氷点下30度になるなど北海道の中ではさらに寒冷地帯。過酷な状況であればあるほど、それを克服しなければならないという農業者の強い思いが、今の姿にしたのではないか。

自ら作ったものを自ら加工して付加価値を付ける。太田寛一（元J A士幌町組合長、元ホクレン、全農会長）の発想だ。農業者が安心して経営し生活ができる、そういう農業地域にしていかなければならないという「ユートピア精神」を十勝で実現した。

林 士幌町の道の駅には太田寛一をモチーフにした「カフェ寛一」がある。NHKの連続テレビ小説「なつぞら」では、主人公なつのお父さんのモデルが寛一とされている。なつぞらで改めて十勝に光が当たっているが、どう思うか。

内田 十勝の酪農家の現実をうまく映し出しているのでは。

林 十勝の住民も「昔の牛舎はあだったよね」などと思ひ返し、それをまた子どもたちに説明できる。まちなかでも、その話題が出ている。

内田 全国的に視聴率が高く、北海道酪農の昔の現実はこうだったと、視聴者も感動して見ているのでは。なつと牛が接するような姿を見て、農業を知らない人でも農業をやろう、牛を飼ってみようという興味、関心が深まったのではないか。

林 十勝の住民にメッセージを。

内田 十勝は北海道、日本の中でも安定した食料基地で、重要な役割を担っている。地域も農業を理解して支えている。これからも発展してほしい。十勝ブ

ランドの存在は大きくなっているが、これは北海道ブランドにつながり、北海道全体に与える影響も大きい。今まで以上に、生産されている農業者、地域の方々には日本の食を支えているのはわれわれだという自信と誇りを持って取り組んでほしい。

林 最近はワインを造るなど、若い農家や生産者が活発に新しいことに取り組んでいる。それをどう見ているか。

◆温暖化、チャレンジの幅広げる

内田 だんだん自立した経営感覚になってきている。自分たちの経営をどう高めていくかとなったときに、農協をうまく活用しながらいろいろなことに挑戦している。酪農家であればバターやチーズを作り、そうした加工品を販売している。

北海道は暖かくなっている。秋の生育期間は短くなり、今まで府県でしか取れなかったものが北海道でも取れるようになった。この点に彼らは着目し、チャレンジの幅が広がっている。ブドウやワイナリーを作る動きもそう、消費者ニーズにどう応えていくかということでは、十勝の組合員はいろいろと情報収集をしながら取り組んでいる。

林 十勝毎日新聞では毎週農業のページを掲載し、最新の研究などをまとめた農業新技術を冊子にして全農家に配布している。帯広市の開基100周年では農業博覧会を開催した。十勝の牛乳を使ったホワイトコーヒーや十勝和牛の消費拡大キャンペーンも行っている。今後も十勝、北海道の農業の発展に貢献したい。

◇対談は7月5日、札幌市内のホクレン本所で行われた。

＜ホクレン経営理念＞

わたしたちは生産者のための協同組合として、会員J Aと連携した事業を通じ、共生の大地北海道から「農」と「食」の未来を担います。

＜うちだ・かずゆき＞

1949年空知管内長沼町生まれ。酪農学園短大卒。畑作農家。2004年にJ Aながぬま組合長に就任し、14年から同会長。14年J A北海道中央会副会長を経て、17年からホクレン会長。